



TITLE:

# 貨幣自體の限界效用(下)

AUTHOR(S):

正井, 敬次

---

CITATION:

正井, 敬次. 貨幣自體の限界效用(下). 經濟論叢 1935, 40(3): 604-612

ISSUE DATE:

1935-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130565>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號參第 卷十四第

行發日一月三年十和昭

## 論 叢

礦產稅附加税の課稅權者……………法學博士 神戸正雄

預金の積極性と消極性……………經濟學博士 小島昌太郎

第三史觀の概念……………文學博士 米田庄太郎

## 時 論

交換貿易制より見たる吾國の貿易……………經濟學博士 谷口吉彦

## 研 究

ミロオの金なき國際交換決濟制に就いて……………經濟學士 松岡孝兒

貨幣の轉回速度の構想に就いて……………經濟學士 有井 治

貨幣自體の限界效用……………法學士 正井敬次

## 說 苑

ウィリアム・ペティーの經濟說……………經濟學士 相澤秀一

支那のボーコットに就て……………經濟學士 黒松 巖

景氣理論に於ける シュビイトホフとハイエク……………經濟學士 尹 行 重

## 附 録

新着外國經濟雜誌主要論題

## 貨幣自體の限界効用（下）

正井敬次

## 三

右の如きが私に於ける貨幣自體の限界効用に關する概念的の説明であるが、斯の如き貨幣の限界効用が、私に於てはまた、貨幣の主觀的價值と云はるゝものゝ眞の姿である。蓋、貨幣經濟的の價格論に於ては、問題の重心は價格に影響を及ぼす所の貨幣側の原因といふ一點に存するのであるが、今若しその原因を貨幣價值の變動といふことに置くことが一般に許さるゝものとするならば、この場合の貨幣價值は數量說（所得說をも含めたる）に謂ふ所の貨幣價值ではなくして、右に私の云ふが如き貨幣價值でなくてはならぬ。何となれば、數量說に於ける貨幣價值は買はるゝ商品の効用に依存する所の貨幣の効用を以てその基礎とするものであり、從つてそれは價格と相表裏するものたらざるを得ざると同時に、それは云はゞ價格の内に存するものたるに反し、私のいふ貨幣價值は貨幣自體の効用に基きて構成せらるゝものであり、それは價格と獨立して云はゞ價格の外にあるものなるが故に、價格を支配する貨幣側の原因力といふときは、それは右に私の云ふが如き貨幣價值たらざるを得ないが故である。

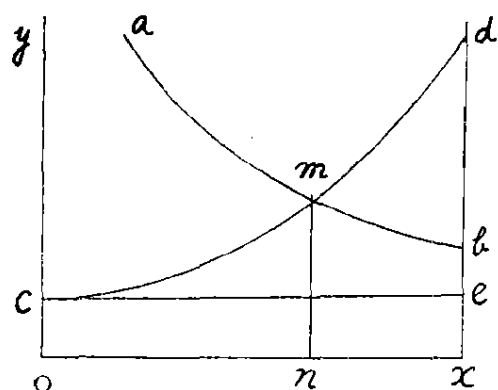
蓋、價格の要因たる貨幣の價值が右の如きものたらざるを得ないといふは、これ即ち資本主義に於ける動態經濟の特徴である。資本主義經濟又は資本家的經濟とは、根本的には、それは貨幣の本質に價值保有者たるの一面を許すところの貨幣經濟である。非資本主義的の貨幣經濟に於ては貨幣は單なる購買手段でありまた指圖證である。斯の如き貨幣經濟にありては貨幣の貯蓄が豫想せられない、從つて貯蓄の量を以て貨幣價值の構成に關する質的要素たる貨幣欲望の表現とするが如き貨幣價值の理論は、この經濟に於ては問題となり得ない。例へば、極端に見て、所得が日々に支拂はれ且つ貨幣の貯蓄が許されざるが如き經濟に於ては、貨幣價值は「三三三」といふが如き構成の形式をもち得ないであらふ。眞に斯の如き經濟に於ては價格要因としての貨幣の價值は存在せないのである。同様に資本主義貨幣經濟に於ても、例へば宵越しの錢をもたぬ人々の社會にありては、右の如き意味の貨幣價值は生れては來ない。

今、均衡理論的の貨幣價值説(數量説)は、つまり靜態に於ける貨幣價值を問題とするものであるが、それは右に云ふが如き非資本主義的の貨幣經濟について豫想せらるゝ貨幣價值の理論と同一である。即ち論者は所得が總て購買貨幣でありそれが貨幣存在量であるとして、而してそれと買はるゝ商品量との關係に於て價格の變動を見んとするものであるが、斯の如くなる限り、資本主義的經濟變動の要因たる貨幣貯蓄の變化といふものが何處にか取り殘されておる。かくして、均衡理論的貨幣價值説によるときは、資本主義的なる價格要因としての貨幣の價值を知ることが困

難である。

近時、フリッシュ教授は限界効用の測定に關して有益なる數理的研究を試みし點に於て著はれておるのであるが、教授は貨幣の限界効用を説明するに際して次の如くに云つてゐる。曰く、「貨幣の限界効用は、個人が所持する所の手持金又は彼が所有する資金の分量にも依存するものと見ることが出来る。斯の如き資金は將來に對する保證の意味をもつものなるが故にそれは貨幣効用の現在の大きさに影響を與ふるものと看做し得る。然るにこれは貯蓄に關係を有する問題である。併し余は茲にてはこの點には立ち入らざることにする」(Ragnar Frisch, *New Methods of Measuring Marginal Utility*, p. 13)。併しながら私共の立場に於ては、貯蓄の問題が價格要因としての貨幣の限界効用を決定する。従つて貯蓄を問題とせざる限り右の意味に於ける貨幣の限界効用は説明せられ得ない。

以上に於て私は、私の意味に於ける貨幣の限界効用にして初めてそれが價格決定に關する貨幣



側の要因たり得ることを述べたのであるが、それは換言すれば、

一の個人に於ける或商品の需要價格は、商品自體の效用曲線のみによつて形成せらるゝことなく、貨幣自體の效用曲線的作用を持つて初めてその成立が可能である、といふを意味する。然らば今、需要價格と貨幣自體の效用との關係は如何であるか。

上圖に於て、 $ox$ を所得の量とし、 $oy$ を所得各單位の間接効用の曲線(商品の効用曲線)とし、 $cd$ を貨幣自體の效用曲線とする。然るときは $mn$ が需要價格の大きさを現はす。

而してこの要素價格に於ては、 $om$ だけの貨幣量が購買貨幣となり、 $ox$ だけが貯蓄貨幣となる。

右の圖形は所得の効用に關するものなるが故に、その中に於て商品の需要價格を問題にするは不合理であるとするならば、これを次の如くに見てもよい。 $\alpha$ は貨幣供給の曲線であり、 $\beta$ は貨幣需要の曲線である、次に $\gamma$ は貨幣の價格(交換價值)である、而してこの價格に於て $\alpha$ だけの貨幣が供給(支出)せられ $\gamma$ だけが需要(貯蓄)せられる、と。即ち何れにしても $\gamma$ は貨幣の價格であり、同時に商品の價格である。右の如くにして、私に於ては、 $\alpha$ といふ貨幣自體の效用曲線なくしては、商品の需要價格は決定せられない。元よりそれは貨幣を一の交換對象と見る限りに於てである。貨幣を獨立の評價客體と見ず従つて貨幣自體の效用なるものを認めざる場合、需要價格は何によつて決定せらるゝかと云ふに、それは一に所得の數量によつてである。即ち右の圖形に於て $\gamma$ が所得の間接効用に關する限界効用であるが、貨幣自體の效用曲線 $\alpha$ が問題とせられざる場合、需要價格は右の如き所得の限界効用に依存するものと云はねばならぬ。併しながら斯の如き需要價格は貨幣の評價といふ貨幣側の主觀的要因を無視する所の價格である。

貨幣自體の効用が需要價格に作用を及ぼすこと右の如くであるが、次に貨幣自體の限界効用を右の圖形について説明するときには如何であるか。問題は、貯蓄貨幣たる $\gamma$ の限界効用ではなく、所得 $\alpha$ に關する貨幣自體の限界効用である。さて圖形によるときは $\alpha$ に對する貨幣自體の限界効用は $\alpha$ であり、その全部効用は面積 $\alpha\beta\gamma$ である。併しながら今、クラークに於ける實際効用(effective utility)<sup>11)</sup>の觀念とウイザーの全部價值の説明<sup>12)</sup>に従ふものとするれば、全部効

11) Clark, Essentials of Economic Theory, p. 54.

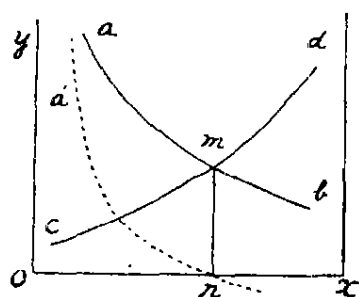
12) Wieser, Der Natürliche Werth, S. 27 ff.

用は實際上に於て面積  $COXC$  である。是に於てか  $OX$  各單位の限界効用は  $\frac{COXC}{OX}$  であると云ひ得る。然るに私は前提として貯蓄量  $ON$  の大きさが全部効用  $COXC$  を代表するものと見た。即ち、私によれば觀念的な全部効用の大きさが現實の數量たる貯蓄の量に於て現はれる。是に於てか、

$\frac{COXC}{OX}$  は現實には  $\frac{NX}{OX}$  である。かくして要するに貨幣自體の限界効用は  $\frac{NX}{OX}$  である。更にまた

$COXC$  と  $NX$  との關係を理論的に考察するに、前の圖形に於て、貨幣の間接効用曲線  $bc$  が不變なるに貨幣自體の効用曲線  $ab$  が變動するものとすれば、價格  $mm$  と全部効用  $COXC$  と貯蓄量  $NX$  とは相關々係的に變動する。故に  $\frac{COXC}{OX}$  と  $\frac{NX}{OX}$  とは其變動に於て同一の傾向をとると云ふことが

許される。従つてその後者を以て前者の表現と見ることは理論的に可能である。



上圖に於て貨幣自體の限界効用は貯蓄貨幣の全部効用  $mmx$  の面積であり、而してまたその限界効用(限界効用度)は  $mm$  であると見てはならぬ。併しながら一方、購買貨幣の限界効用又は所得に於ける間接効用の限界効用は  $mm$  である。然らば何故に自體効用と間接効用とに就て貨幣の限界効用は測定の點を異にするか。それは次の如き理由による。

貨幣自體の効用曲線  $ab$  と貨幣間接効用(商品効用)の曲線  $bc$  との交互作用を一の曲線にて現はすものとすれば、それは上圖に於ける點線  $abc$  であるが、曲線  $abc$  に於ては貨幣一位毎に貨幣自體の効用と買はるゝ商品の効用とが比較せられる、其結果購買貨幣の支出は  $n$  の點に止められる、其場合貨幣自體の評価は  $OX$  といふ貨幣存在量(所得)を前提として行はれるのであつて  $ON$  又は  $NX$  が前提とはなつておらぬ。購買貨幣が  $n$  點に於て止められ購買貨幣量が  $ON$  に決定せらるゝとき、購買貨幣の限界効用は  $n$  點に於て測られなければならぬ。

併し所得全體又は所得自體の限界効用は $\rho$ の點には關係がない、何となれば所得全體の分量を前提とする所得一單位の評價は $\rho$ までの部分に就ては行はれたが、其餘の $\rho x$ については行はれておらぬ、故に所得自體の限界効用は購買貨幣の最終點に於て測らるべきものではないからである。

右の如きは元より個人的なる貨幣自體の限界効用と需要價格との關係である。然らば次に社會的又は一般的なる貨幣の限界効用又は貨幣價值とは如何なるものであり、かつそれと物價との關係は如何であるか。蓋、吾々によれば個人的なるものゝ總合が社會的なるものなるが故に、社會的なる貨幣限界効用又は貨幣價值は、社會全體としての貨幣欲望量(準備金)と貨幣存在量(所得)との關係そのものである。是に於てか、今社會に存在する貨幣の總量が前者に當るものと見て而してそれを $K$ にて示し、次に流通貨幣の總量(シムベエダーの $\Sigma M$ )を後者であるとして之を $M$ にて示すときは、社會的なる貨幣の限界効用又は貨幣價值は $\frac{K}{M}$ である。然るにそれは素朴なる意味に於ての貨幣の流通速度又は貨幣の効率(Efficiency)と云はるゝものの逆數である。かくして私は、個人的なる貨幣の主觀的價值の總合が $\frac{K}{M}$ といふ社會的なる貨幣の主觀的價值となつて現はれるのであるが、それは貨幣流通速度の逆數なるが故に、要するに俗に金廻りがよいと云はるゝ際は貨幣價值の小なるときであつて、それが物價騰貴の原因となり、反對に金廻りのわるきときは貨幣價值の大なる際であつてそれが物價の下落を導く、と云ふが如くに貨幣價值が物價に影響を及ぼすものと考へる。



## 四

財の限界効用は純粹主觀的には財自體に對する欲望と財の存在量との關係に基きて成立する、と見るとき、斯の如き意味の限界効用は、貨幣については、從來如何なる人々によつて而して如何なる方法によつて說かれ來つたであらふか。即ち私は次に、其意圖については別問題であるが其結果に於て右の如くならざるを得ない、と云ひ得るが如き一二學者の限界効用理論的な貨幣價值説を簡單に紹介する。

一般には貨幣の主觀的價值又は貨幣の限界効用の理論に關聯して最も屢々ミーゼス教授の名が口にせられる。併しながら私によれば、一般に問題とせらるゝミーゼスの貨幣價值理論には限界効用理論が存在せずして、寧ろ彼の貨幣理論の他の箇所<sup>13)</sup>に於てそれが發見せられる。蓋、ミーゼスは貨幣の價值を主觀的交換價值、客觀的交換價值、内部客觀的交換價值などの種類に分つのであるが、貨幣には主觀的使用價值は存在せず、それに當るものは貨幣に於ては主觀的交換價值である、とするミーゼスに於ては、主觀的交換價值の説明が貨幣價值の本源の説明に當るものとせられた。かくしてミーゼスは知らるゝ如く貨幣價值の歴史性といふ説明方法により、貨幣の價值は初め貨幣が貨幣となる際の貨幣貨物の限界効用にその根元をもつ、と説明した。併しながら既にヒルシュも云ふが如く、<sup>13)</sup>右に於てはミーゼスは貨幣價值の問題を現在より過去へ押し遣るのみであつて決してこれを解決しておらぬ。また貨幣の最初の貨物價值としての交換價值について初めて限界効用理論の適用が見られる、といふに至つては、それは貨幣の限界効用を論ずるにあ

13) Hirsch, a. a. O., SS. 127, 129.

らずして貨物の限界効用を説くものである、と云はねばならぬ。

蓋、ミーゼスは、貨幣經濟に於ては問題となし得ない所の、自然經濟的な使用價值の概念を貨幣の價值に結び付けることによつて、貨幣價值の説明を難澁ならしめた。私によれば貨幣經濟的な貨幣の主觀的價值（自然經濟の使用價值に對する利用價值）は、ミーゼスに於て内部客觀的交換價值と云はるゝものがそれである。それはミーゼスによれば客觀的交換價值の變動に對して原因をなすものと見られる。即ち私に於ける價格の要因としての貨幣の價值がまたそれである。是に於てか、ミーゼスが若し貨幣の内部客觀的交換價值について限界効用理論的の説明を行ふものとすれば、吾々は彼が貨幣の限界効用に關する説明を其點に於て試みるものと見る事が出来る。然るに、ミーゼスは貨幣の内部客觀的交換價值は、貨幣需要 (Geldnachfrage) と貨幣供給 (Geldangebot) との關係に基きて變動するとし、而して其説明に於て貨幣需要を貨幣欲望 (Geldbedarf) とし而して貨幣供給を貨幣存在量 (Geldvorrat) とする。元より既に云ふが如くミーゼスの意味に於ける貨幣欲望と貨幣存在量とは吾人に於けるそれ等のものと同一ではないが、併し貨幣自體に對する評價が認めらるゝ所のミーゼスの貨幣價值に關する需要供給説は、それは根本に於て私に於ける貨幣限界効用の理論に通ずる所あるものと云ひ得る。但し、私は茲にミーゼスの需要供給説をそのまゝに紹介するの餘地をもたぬ。

アフタリオンは、限界効用の概念には量の要素と質の要素とが結び付いておる、と云ふ點に於て限界効用概念を正當に解釋する學者の一人であるが、次に彼はウイイザアーの所得説を批評し

14) Mises, a. a. O., S. 115 參照

15) Aftalion, op. cit., p. 202.

て、所得説が貨幣價值に關する量的要素として所得をとるは可なるも此説に於ては貨幣について何等獨立なる質的要素の存在が認められない<sup>16)</sup>、として、所得説が限界効用理論的の貨幣價值説たり得ざることを説けるは、最も私の意を得たる點である。

所得説に於ては貨幣存在量に對して固有の意味に於ける貨幣需要 (Geldbedarf) なるものが認められない、此説に於ては、需要は貨幣に對する需要ではなく貨幣に現はれたる貨物需要のことである (Wieser, Geldwert und seine Veränderungen, S. 509)。かくして、ウィーザー、シュムペーター、ボルトキーウィッツ等に於ける所得説は、貨幣價值決定の要素は、所得と價格と貨物需要の三者であるとするのであるが、吾人によれば斯の如き貨幣又は所得の限界効用は單に反射的の限界効用であつて、貨幣そのものの限界効用ではない。

右の如く、アフタリオンが所得説に反對して、次に貨幣自體に對する評價を以て貨幣價值に於ける質的要素と看做さんとするに至つてのかれの貨幣價值概念は私に於ける貨幣自體の限界効用の概念に一致するものと云ひ得る。かくして、アフタリオンは、今或二人に於て商品に關する効用曲線が同一である場合に於ても、貨幣の効用曲線が同一ならざるときには、この二人は商品に對する同一の需要又は供給の曲線をもつて市場に現はれることがないとして、商品に對する需要又は供給の曲線は商品効用と貨幣効用との二種の曲線の結果であるとして見ておる。而して結局彼は、商品に對する需要供給の曲線を貨幣の側に於て説明することが、貨幣理論の主たる任務である、と云ふ<sup>17)</sup>。アフタリオン教授は右の如き貨幣効用の曲線を具體的に説明する所がなかつたとは云へ、併し根本的には私が試みるが如き貨幣限界効用の説明方法を是認するものと云はねばならぬ。

16) Aftalion, Ibid., p. 204.

17) Aftalion, op. cit., pp. 228, 229.